

地名はなぜ・どのように難読化するか¹⁾

—難読化のプロセスに見られる音法則を探る—

大 高 博 美

I. はじめに

日本語の地名には読みの難しいものが少なくない。例えば、下に掲げる地名はどれも筆者の居住する関西地区から選んだものだが、いくつ読めるだろうか？（答えは脚注を参照²⁾）

例：太秦（京都市） 先斗町（京都市） 膳所（大津市） 放出（大阪市）
吹田（吹田市） 枚方（枚方市） 交野（交野市） 間人（京丹後市）
売布（宝塚市） 老波（朝来市）

恐らく、特に関西圏に住んでいない者にとっては、どれも難読と感じられるのではないだろうか。ローカル性の高い地名ほど、馴染みが無い分、難読となる傾向がある。このように、日本の地名には、人名のキラキラネーム同様に、「教わらなければ読めない」という範疇の難読地名が存在するのである。漢字音の知識がほとんど役に立たず、予測が不可能だからである。ちなみに、北海道にはアイヌ語由来の日本語地名があり、こちらもやっかいである。「長沼」（← tan. netoo= 細長い沼）のような、その地の原義を表すアイヌ語音に漢字が当てられて出来た地名を除けば、多くの場合、難読である。下の例からも分かるように、アイヌ語の発音を写し取ってカナ表記しそれに漢字が当てられているからである。

例：倶知安（クッチャン）← kucha. an. nai 「小屋のある川」

月寒（ツキサム）← tsuki. sappu ← chi. ki. sapu 「我々・こする・もの」

札幌（サッポロ）← sa. poro. pet 「乾いた・大きな・川」/sari. poro. pet 「その葦原が・広大な・川」

ここで注意したいのは、同じ難読地名であっても、その難しさにはレベルがあるという

1) 本稿は、筆者が2018年6月に三田市で開かれた市民大学講座（関西学院大学との共催）で講演した原稿に加筆修正したものである。

2) 太秦（ウズマサ）、先斗町（ポントチョー）、膳所（ゼゼ）、放出（ハナテン）、吹田（スイタ）、枚方（ヒラカタ）、交野（カタノ）、間人（タイザ）、売布（メフ）、老波（シワナミ）：これらの地名の由来については、参考までに、稿末に記載する。

ことである。「先斗町」(ポントチョー)のような、まったく予測不可能なレベルの地名から、「吹田」(スイタ)のような教われれば納得できるレベルの地名まで (cf. 吹奏楽 = すいそうがく)、多岐に亘るのである。前者のタイプには、「先斗町」の他にも「和泉 (いずみ)³⁾」や「大和 (やまと)⁴⁾」のような地名が挙げられ、多くの場合、語源にその地の伝説が多かれ少なかれ関わっており、その結果、漢字本来の読みが規範から逸脱しているという特徴がある。よってこのタイプは、歴史ある地名に多いと言える⁵⁾。

本稿では、上述のような難読地名 (つまり、アイヌ語に由来する地名やあたかも現代のキラキラネームのように規則性のない万葉仮名的漢字表記法が採られている地名) は扱わない。本稿の目的は、ある種の難読地名には長い時間をかけて言語学的に予測可能な過程を経て変化したものも多いことを示すことにあるからである。併せて、その変化を引き起こした音法則と理由に言及するのも目的の一つである。ちなみに、これまでの地名研究においては、筆者の知る限り、このような言語学的視点に立って地名の変遷を分析したものはない。

II. 本稿で扱う難読地名

繰り返すが、本稿では、一般的な音変化の規則に則って難読化した地名を研究対象とする。このタイプの難読地名には、音変化のプロセスを辿れば、読みの類推が可能になるという特徴がある。例えば、下に挙げるのは、どれも筆者の住む関西圏にある難読地名であるが、右側に矢印で示した音変化の過程を辿れば、現行の読みに違和感がなくなるであろう。しかし、では一体なぜこのような音変化が起こるのだろうか。この問いに答えるために、次節では、まず言語の音変化を操作する普遍的な原理三種に言及し、これを基に本論を進めたい。我々の言語にはこのような原理が存在し機能していることを知れば、地名の難読化現象も、時間の経過と共に、起こるべくして起こった現象だと見做せるようになるであろう。この点については、後に詳述する。

例：近江 (オーミ 滋賀) oumi ← aumi ← awami (淡水 = 琵琶湖) ↔ 遠江 (浜名湖)
 母子 (モーシ 三田市) mooshi ← moushi ← mosshi ← bosshi ← boshi

3) 和泉市のホームページにある郷土史によると、「和泉」という表記は、元は「泉」一字の地名で、和銅六年 (713年) に風土記の編纂が命じられた時、諸国の国郡郷名は良き字 (文字として美しくよい意味の字) を付けるようにという命が出され (『続日本紀』)、これを受けて、この地名も二字の嘉名 (和泉) となったとある。
http://www.city.osaka-izumi.lg.jp/izumishi_profile/yurai.html

4) 「大和 (ヤマト)」は、現在の奈良県を指す言葉だが、語源的説明の一つに、元々は「山門」 (門 = 戸 = 「入口」) だったとする説がある。尚、ヤマトの当て字には、その昔、中国と朝鮮から見た日本を指す「倭」に美称の「大」の付いた「大倭」が使われていたとのことである (永井俊哉: <https://www.nagaitoshiya.com/ja/2010/yamadai-yamatai-yamato/>)。

5) よって、関西には難読地名が多いと言える。例えば、大阪市東淀川区にある「柴島 (くにじま)」は平安時代には「国島」だったが、「国」が「柴」という字に変わり、読み方だけが残ったといわれる。
 なまえさあち: <https://name.sijisuru.com/Roots/fname?fname=%E6%9F%B4%E5%B3%B6>

木器（コースキ 三田市）koo. zu. ki ← koo. no. ki ← ko. no. ki ← ki. no. ki
← (ki. ki)

柏堂（カヤンドー 西宮市）kayando ← kaya no doo

神呪寺⁶⁾（カンノージ 西宮市）kaN. noo. ji ← kaN. oo. ji ← kam. oro. ji
← kami. norou.ji

上で示した分析方法から分かる通り、本研究では地名難読化の過程に複数の音変化の関与を想定し、その出発点となる原形はそれぞれの地名に使われている漢字の読み（音と訓）としている⁷⁾。しかし、実は、ここで想定している原形が本当に歴史的に正しいものであったか否かは定かではない。今となっては証明する方法がないからである。特に、漢字使用が広まる前から存在したかも知れない地名の場合は、上述の想定は的を外していることになる。しかし、ある種の歴史ある地名が正確にいつごろから使われ出したかについては知る術がないし、奈良時代に入って漢字使用が一般化してから名づけられた地名も多いはずである。後者の場合、その命名過程においては、まず該当地域をシンボリックに表す意味が選ばれ、次にこの意味を表すための漢字が当てられたと想定できる。そしてその結果、地名の読みは、当初において、使われる漢字の読みと同じだったはずである⁸⁾。繰り返すが、本研究で扱う地名は、このケースに当て嵌まるものに限る。言い換えれば、地名に関する言い伝え（伝説）が一切ないものに限るということである。尚、本稿で音変化を経て出来た地名の例として挙げるものは、筆者にとって扱いやすいという理由から、関西地方のものに限っている。

Ⅲ. 言語を支配する三種の原理

地名難読化のプロセスを合理的に説明するためには、次の三種の原理の想定が必要である。どれも人間の使う言語に普遍的に存在する原理で、なにも地名変化においてだけ関与するというものではない。

- ① 経済原理 ② 明晰化の原理 ③ 必異原理

6) この甲山山麓にある仏寺は、寺の資料によれば、天長5年（828年）の創建である。その寺名に関しては、当初の「神の寺」が変化したものという説があるが、本稿では使用漢字の原義を最大限に考慮して異なる説を採用。「呪う」は古語に「祈る」の意があるので、9世紀の創建時には「神呪う寺」（神に祈る寺）であった可能性も高い。よって本稿では、後者を採用する。

7) また、「十三」（ジューソー 大阪市）の「三」（ソー ← ゾー）のように、人名読みも地名に応用される場合がある。

8) 例えば、山の西側に位置する地であることを地名に盛り込みたいとなれば、「山」と「西」が選ばれ、その読みはヤマニシとなる。

3.1. 経済原理

まず「経済原理」とは、なるべく少ない労力で言語活動を行おうとする力が働くことを指す。下の例に挙げる「短化」「省略」「弱化」「脱落」などの現象は、すべてこの原理で説明がつく。

例：短化現象 行ってしまう → 行っちゃう、電子卓上機 → 電卓

省略 A：あの映画を見ましたか？ B：はい、（ ϕ = あの映画を）見ました。

弱化 bread and butter → [ænd] [ənd] [ən] [n]、すし：sushi → s: shi

脱落 sixth [siksθs] → [sikθs]、ぼくのうち → ぼくんち

さて、国語学で扱われる「音便」も経済原理にそう現象の一つと言える。音便とは、言^{おんびん}い換えると、日本語の歴史上において発音の便宜⁹⁾を目的に語中・語末で起こった連音変化のことである。

3.1.1. イ音便：母音イの前の子音が脱落

例：「衝き-立て」ツキタテ → ツイタテ「ついたて」

「月-立ち」ツキタチ → ツイタチ「朔日」

「埼玉」サキタマ → サイタマ

「咲き-て」サキテ → サイト「咲いて」

「急ぎ-て」イソギテ → イソイデ「急いで」

「高き」タカキ → タカイ

「久しき」ヒサシキ → ヒサシイ

この知見に基づいて地名変化を分析してみると、下に例証する通り、この法則で説明のつくものが割と多いことに気づく。

<イ音便を経た地名>

例：大垣（オオカイ 朝来市）ookai ← oo. kai ← oo. kaki (oo. gaki)

柏原（カイバラ 丹波市）kaibara ← kasi. bara ← kasiwa. hara

→大阪府の柏原はカシワラ、滋賀県米原市の柏原はカシワバラ、京都府亀岡市の柏原はカセバラと読む

萩原（ハイバラ たつの市）haibara ← hagi. bara ← hagi. wara ← hagi. hara

小茅野（コガイノ 宍粟市）kogaino ← ko. kai. no ← ko. kaia. no ← ko. kaya. no

9) CV1 + CV2 ⇒ CVV (V2 = /i/)

3.1.2. ウ音便：「ウ」音前の子音が脱落し「ウ」に変化する音変化¹⁰⁾

例：「日向」 ヒムカ → ヒウガ → ヒューガ

「中-人」 ナカビト → ナカブト → ナカウド → ナコード「仲人」

「醸し」 カモシ → カムシ → カウジ → コージ「麴」

「白-人」 シロヒト → シロフト → シロウト → シロート「素人」

「箒き」 ハハキ → ハフキ → ハウキ → ホーキ「箒」

地名の音変化にウ音便が関与したと思われるものには、例として次のような地名が挙げられる。

<ウ音便を経た地名>

例：母子¹¹⁾（モーシ 三田市）mooshi ⇐ moushi ⇐ mosshi ⇐ bo. shi

一品（イッポー 朝来市）ippoo ⇐ ippou ⇐ ippin ⇐ ihhin ⇐ ichi. hin

田路（トージ 朝来市）tooji ⇐ tau. ji ⇐ tao. ji ⇐ ta. no. ji

七野（ヒツノ 宍粟市）hituno ⇐ hiti. no ⇐ shiti. no

淡河（オーゴ 神戸市北区）ougo ⇐ ou. ga ⇐ ou. gawa ⇐ aw. gawa ⇐ awa. gawa
⇐ awa. kawa

木見（コーミ 神戸市西区）koumi ⇐ Ko. no. mi ⇐ Ko. mi ⇐ Ki. mi

3.1.3. 撥音便：ある音節が「ン」音に変化する音変化¹²⁾

例：「日-向か-し」 ヒムカシ → ヒンガシ → ヒガシ「東」

「髪-挿し」 カミサシ → カンザシ「簪」

「商人」 アキビト → アキンド

「文-板」 フミイタ → フミタ → フンダ → フダ「札」

「踏み-つける」 フミツケル → フンツケル「踏んづける」

撥音便を経て音変化したと思われる地名には、次のような例が挙げられる。

<撥音便を経た地名>

例：尼寺（ニンジ 三田市）ninji ⇐ ni. no. ji

休場（ヤスンバ 篠山市）yasunba ⇐ yasumba ⇐ yasumu. ba

蔵人（クランド 宝塚市）kurando ⇐ kura. no. to ⇐ kura. to ⇐ kura. hito

神吉（カンキ 加古川市）kanki ⇐ kamki ⇐ kami. ki ⇐ kami. kichi

10) CV1 + CV2 ⇒ CVV (V2 = /u/)

11) 「母子」(モーシ) の分析では、/moshi/ ⇒ /mooshi/ のように、ウ音便ではなく単なる母音嵌入 (/o/) の結果として処理することもできるが、ここでは促音 /s/ のウ音便として扱った。

12) CV ⇒ N

富田林（トンダバヤシ 富田林市）tondabayashi ⇐ tomidabayashi
 ⇐ tomida. hayashi ⇐ tomi. ta. hayashi
 土田（ハンダ 朝来市）handa ⇐ hanta ⇐ hani. ta（埴田 = 土田）

3.1.4. 促音便：イ段の音が「ッ」音（つまる音）になる音変化¹³⁾（母音 /i/ が脱落し子音連続が生じて二重子音化）

例：「打ち-て」ウチテ → ウッテ「打って」（utite ⇒ utte）
 「言ひ-て」イヒテ → イッテ「言って」
 「散り-て」チリテ → チッテ「散って」
 「あり-て」アリテ → アッテ「あって」
 「行き-て」イキテ → イッテ「行って」

促音便を経て音変化したと思われる地名には、次のような例が挙げられる。

<促音便を経た地名>

例：法花寺（ホッケージ 豊岡市）hokkeji ⇐ hokkaji ⇐ hoo. ka. ji
 （＊法花と法華の混同か？）

辺地（ヘッチ 美方郡新温泉町）hecchi ⇐ hen. chi
 越坂（オッサカ 美方郡新温泉町）ossaka ⇐ ochi. saka
 越田（オッタ 朝来市）otta ⇐ ochi. ta ＊越 →（音）エツ、オチ、オツ

3.1.5. 一音節（もしくは一モーラ）が脱落する音変化¹⁴⁾

例：墨入れ（sumiire）⇒ スミレ（sumire）
 油揚げ（aburaage）⇒ あぶらげ
 川原（kawahara）⇒ かわら
 手洗い（tearai）⇒ たらい

一音節（もしくは一モーラ）の脱落を経て音変化したと思われる地名には、次のような例が挙げられる。例が簡単に見つけられることから分かる通り、この音変化は最も頻繁に起こる現象の一つである。

<音節脱落を経た地名>

例：内海（ウツノミ 朝来市）utsunomi ⇐ utsunoumi ⇐ uchi. no. umi
 新井（ニイ 朝来市）nii ⇐ nii. i
 宍粟（シソー 宍粟市）shisoo ⇐ shishi. soo

13) CV ⇒ Q

14) CV ⇒ φ

下河野（ケゴノ 宍粟市）kegono ⇐ gekoono ⇐ ge. kawano
 須行名（スギヨーム 宍粟市）sugyoom ⇐ su. gyoo. mei
 土万（ヒジマ 宍粟市）hijima ⇐ hiji. man
 深河谷（フカダニ 宍粟市）hukadani ⇐ huka. wa. tani ⇐ huka. kawa. tani
 道意（ドイ 尼崎市）doi ⇐ doo. i
 昆陽池（コヤイケ 伊丹市）koyaike ⇐ koyo. ike ⇐ kon. yoo. ike
 出石（イズシ 豊岡市）izushi ⇐ izuru. ishi
 大磯（オーゾ 豊岡市）oozo ⇐ oo. so ⇐ oo. iso
 沼島（ヌシマ 南あわじ市）nushima ⇐ numa. shima
 網干（アボシ 姫路市）aboshi ⇐ a. hoshi ⇐ ami. hoshi
 栗生（アオ 小野市）ao ⇐ awao ⇐ awa. oi
 朝阪（アサカ 丹波市）asaka ⇐ asa. saka
 歌道谷（ウトーダニ 丹波市）utoodani ⇐ uta. doo. dani ⇐ uta. doo. tani
 追入（オイレ 篠山市）oire ⇐ oi. ire
 塩岡（ショーカー 篠山市）shooka ⇐ shio. oka
 風深（フーカ 篠山市）huuka ⇐ huu. huka
 別府町（ベフチャー 加西市）behuchoo ⇐ behhu. choo ⇐ betsu. hu. choo
 大柳町（オヤナギチャー 加西市）oyanagichoo ⇐ oo. yanagi. choo
 養父（ヤブ 養父市）yabu ⇐ yoo. bu ⇐ yoo. hu
 三井庄（ミノショー 丹波市）minosho ⇐ mii. no. sho ⇐ mitsui. no. sho
 大垣内（オーガチ 西脇市）oogachi ⇐ oo. gaki. uchi ⇐ oo. kaki. uchi
 近平（チカラ 神崎郡神河町）chikara ⇐ chika. hira
 上計（アゲ 美方郡香美町）age ⇐ a. kei ⇐ age. kei
 徳久（トクサ 佐用郡佐用町）tokusa ⇐ toku. hisa
 初瀬（ハセ 奈良県桜井市）hase ⇐ hasse ⇐ hatsuse

3.2. 明晰化の原理

「明晰化の原理」とは、聞き手に誤解されそうな紛らわしさを意図的にできるだけ修正しようとする働きのことである。次の例1では、英語の形態素 //s//（「複数」もしくは「三人称単数」のマーカ―）が先行の名詞・動詞に付加する際に、祖擦性子音の後では挿入母音 (ə, I) を伴う音変化が起こることを示している。この母音嵌入がないと、形態素間の境界が聞き取れなくなるからである。

例1：形態素境界をはっきりさせるための母音挿入

map → maps, cat → cats
 pack → packs, bath → baths (/bəθs/)

mob → mobs, bed → beds
 bus → buses, wish → wishes,
 punch → punches, buzz → buzzes [挿入母音 (ə,ɪ)]

次の例2は「レトロニム」と総称される語彙だが、これも明晰化の原理が関わって生じるものである。例えば、「メール」と言えば、昔は普通の郵便のことであったが、電子メールが誕生するとこれとの区別をはっきりさせるために「スネイルメール」（「遅い郵便」）という新語が誕生した。また、「科学」と「化学」を混同しないように、後者を「バケガク」と呼んだりするのも同じ理由による。

例2：レトロニム

メール → 電子メール / スネイルメール
 テレビ → カラーテレビ / 白黒テレビ

この原理で説明のつく地名の数は、多くない。関西圏の地名で筆者が思いつくのは兵庫県の西に位置する一市の名前「相生」（アイオイ）くらいである。尚、原形を「オオ」と想定したのは、相生市の市名の由来についてのある記述¹⁵⁾からの借用である。

＜明晰化の原理で説明できる地名＞

例：相生（相生市）aioi ← a. o ← o. o

3.3. 必異原理 (Obligatory Contour Principle: OCP)

これは語内で同じ音韻単位が連続することを阻む力のことで、元々、中国語の声調研究から発見された原理である。ここでいう「音韻単位」とは、分節音（子音と母音）だけでなく強勢単位や声調単位なども含まれる。尚、早口言葉が難しいのは、この理由に逆らう作りとなっているからである¹⁶⁾。

例：你好：/ 三声 + 三声 / → / 二声 + 三声 /

∨ + ∨ / + ∨ (∨ = 下降上昇、/ = 上昇)

必異原理の存在を示すその他の例

英語からの例：

A : February → /febjuəri/ probably → /prabli/
 B : accident → accidental bride → bridal

15) 市名「相生」の由来：この地は、1913年1月1日に周辺の村に先駆けて相生町となるが、それ以前には「オオ」（歴史的仮名遣いでは「アオ」）と呼ばれていたとのことである。相生市 HP: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9B%B8%E7%94%9F%E5%B8%82>

16) 例えば「生麦生米生卵」(/namamugi namagome namatamago/)では、連続する三語（6形態素）の中に鼻音 (/n, m/)、有声軟口蓋破裂音 (/g/) そして母音 (/o/) が何度も使用されているのが看取できる。

convention → conventional	digit → digital
form → formal	globe → global
single → singular	pole → polar
module → modular	circle → circular
capsule → capsular	angle → angular

C : section /-ʃən/ vs. question /-tʃən/

上の英語からの例（A）では、February や probably のように、語内に同じ分節音が2つ以上存在すると、実際の発音ではどちらか一方が消失しやすくなる。また、接尾辞 // -al// と // -ar// は共に名詞を形容詞に変えるマーカー（接尾辞）であるが、どちらが選ばれるかにはルールがある（B）。つまり、語根である名詞がすでに子音の /l/ を持っている場合、必異原理から // -al// は選ばれないのである。さらに、（C）の例から、名詞マーカーとしての語末形態素 // -tion// の発音が先行子音の種類によって異なる理由も、必異原理に求められる¹⁷⁾。

日本語からの例：

体裁 /taisai/ → /teisai/
 三郎 /sanro:/ → /samro:/ → /saburo:/ （/n/= /r/= 歯茎音）
 不随意筋 /huzuiikin/ → /huzuikin/ （母音イが脱落しやすい）

日本語の借用語には語末音節の子音が無声化するものがあるが、この理由も必異原理に求められる。

例：bag バック	bed ベット	dog ドック
god ゴット	bad バット	badge バッチ
zed ゼット	deadball デットボール	
goods グッツ	blues ブルース	

上の日本語からの例では、「体裁」（taisai）と「三郎」（saburou）がそれぞれ /teisai/、/saburou/ と読まれるようになった理由が必異原理にあることを示している。つまり、前者では二重母音 /ai/ が語内で二度使用されることが避けられ、後者では同器官子音（/n/ と /r/：歯茎音）の連続使用が避けられているのである。また、母音 /i/ を2回連続して語中に持つ「不随意筋」がよく間違えられて /fuzuikin/ と読まれるのも同様の理由から

17) つまり、無声摩擦音 /s/ の後では、同じ摩擦音の /ʃ/ が避けられ、代わりに破擦音 /tʃ/ が採用されるということである。

である。

必異原理を経て音変化したと思われる地名には、次のような例が挙げられる。

＜必異原理にそって変化した地名＞

例：古森（コーモリ 篠山市）koomori \Leftarrow ko. mori

出石（イズシ 豊岡市）izushi \Leftarrow izuishi

箕面（ミノオ 箕面市）minoo \Leftarrow mino. mo

母坪（ホツボ 丹波市）hotsubo \Leftarrow bo. tsubo

能倉（ヨクラ 宍粟市）yokura \Leftarrow yoku. kura

椎堂（シドー 尼崎市）shidoo \Leftarrow shii. doo

例えば「小森」(/koomori/) が /komori/ でないのは、1モーラ母音 /o/ を語中に2度使うのを避けるためであり、「出石」(/izushi/) が /izuisi/ でないのは母音 /i/ の3回連続使用を避けるためである。

ところで、先に明晰化の原理にそうものとして挙げた「相生」(アイオイ：/oo/ \Rightarrow /ao/ \Rightarrow /aioi/) の音変化は、ここでの原理に違反していないだろうか？ 同母音連続の /oo/ が異種母音連続の /ao/ に変化するのは理解できるとして、その後、何故母音 /i/ が二度付加されるのか納得できない。必異原理に逆らうように思えるからである。しかし、母音連鎖 /ai/ と /oi/ は、共に低母音と高母音から成る二重母音だと見做せば¹⁸⁾、上の疑問は水解する。二重母音は、音韻単位として単母音とは異なるからである。

IV. 語の複合化

「複合化」は語形成において頻繁に採られる方法の一つである。例えば、日本語の語彙には下の例のような語形成が多く観察される。

例：和語における複合化

- | | | |
|------------|-----------|--------|
| a. 名詞-名詞： | aki-zora | 秋空 |
| b. 形容詞-名詞： | tika-miti | 近道 |
| c. 動詞-名詞： | nomi-mizu | 飲み水 など |
| d. 名詞-動詞： | yuki-doke | 雪解け |
| e. 動詞-動詞： | tati-yomi | 立ち読み |
| f. 名詞-形容詞： | hara-ita | 腹痛 |

18) 日本語に母音連鎖以外にも二重母音が存在するか否かは議論の余地がある。しかし、現在では、少なくとも母音四角形 (vowel space) において母音間距離が長い /ai/ のような連結母音は、二重母音と見なされている(大高2016)。

一方、「複合化」は英語にも見られ、その複合語形成ではストレスが重要な働きを担う。

例：Hotdog, Greenhouse, Goldfish, Whitehouse, Dancing teacher,
Sleeping bag, Briefcase など

連濁現象：

日本語において複合化の機能を担う規則に「連濁」がある。連濁とは、複合語の第2要素（形態素）が無声子音で始まる語である場合に、それが有声音化する現象のことである。尚、連濁は発音を容易にする¹⁹⁾ という意味で、先の経済原理にそう音変化とも言える。

例：竹 + 竿 [sao] → 竹竿 [takezao]
人 + 妻 [tsuma] → 人妻 [çitozuma]
鼻 + 血 [ŋi] → 鼻血 [hanaži]
豚 + 汁 [širu] → 豚汁 [butažiru]
神 + 棚 [tana] → 神棚 [kamidana]

連濁を経て音変化したと思われる地名には、次のような例が挙げられる。

＜連濁を経た地名＞

例：相認（アイガセ 三田市）aigase ← ai. kase

朝来（アサゴ 朝来市）asago ← asa. ko cf. 朝来（ase. ku: 舞鶴市）

難波（ナンバ 大阪市）nanba ← nan. ha

志染（シジミ 三木市）shijimi ← shi. shimi

高所（コーゾ 宍粟市）kouzo ← kou. so ← koo. sho

神戸（コーベ 神戸市）koube ← kaube/kan. be ← kau. be/kam. be ← kamu. be
← kami. he

（cf. カンベ、カノト、カンド、カド、コード、ゴード、ジンゴ）

例外：生栖²⁰⁾（いぎす：宍粟市）← 栖 / 巢

生谷²¹⁾（いぎだに：宍粟市）⇒ 千葉県佐倉市 生谷（おぶかい）

千葉県香取市 岩部 生谷（しょうざく）

連声：日本語の連音の一種である。2つの漢字からなる語の一番目の字が子音で終わり、

19) その理由は、母音間の無声子音を有声化すると声帯振動を音生成の途中で止めなくてよくなるからである。

20) この地名の場合、後続形態素「栖」(/su/：元々は「巢」から)の無声頭子音 (/s/) が有声化せずに、先行音節の頭子音 (/k/) が有声化している。珍しい例であるが、「舌鼓」(/sita.zutsumi/, /sita.tsuzumi/) の例からも分かるように、探せば他にも例がない訳ではない。

21) この地名では、後続形態素の頭子音ばかりか、その先行音節の頭子音までもが有声化している。「縄梯子」(nawa.basigo) における不規則性を思い出させる例である。

かつ二番目の字がア・ヤ・ワ行であるときに、それがタ・ナ・マ行に変化する現象を指す。言語学的には長子音化の一種である。

例：天 (teN) + 皇 (ou) → 天皇 (teN. nou)
 反 (haN) + 応 (ou) → 反応 (haN. nou)
 三 (saN) + 位 (i) → 三位 (saN. mi)
 観 (kan) + 音 (oN) → 観音 (KaN. noN)
 因 (iN) + 縁 (eN) → 因縁 (iN. neN)

尚、この現象は、和語に起こる「子音挿入」(例：haru + ame → harusame 春雨)と似て非なるものである。漢語の熟語にしか起こらないからである。

母音交替：一つの語根中の母音が、文法機能や品詞の変化に応じて、音色や長さの違う別の母音と交代すること。

例：雨 => 雨雲、雨足、雨傘、雨乞い、雨ざらし
 風 => 風向き、風上
 眼 => 瞼 (まぶた)、目の当たり、眼 (まなこ)
 手 => 掌 (たなごころ)
 胸 => 胸騒ぎ、胸元

母音交替を経て音変化したと思われる地名には、次のような例が挙げられる。

＜母音交替を経た地名＞

例：口銀谷 (クチガナヤ 朝来市) kuchiganaya ⇐ kuchi. kane. ya
 久留引 (クルブキ 朝来市) kurubuki ⇐ kuru. hiki
 高生田 (タコーダ 朝来市) takooda ⇐ taka. u. ta
 早田 (ワサダ 朝来市) wasada ⇐ wase. ta
 田路 (トージ 朝来市) tooji ⇐ taoji ⇐ ta. no. ji
 七野 (ヒツノ 宍粟市) hitsuno ⇐ hichi. no (七 =shichi/hichi)
 青木 (オーギ 神戸市) oogi ⇐ ao. ki
 木間生 (コモー 猪名川町) komoo ⇐ koma. oi
 拳田 (アグタ 丹波市) aguta ⇐ age. ta
 不来坂 (コノサカ 篠山市) konosaka ⇐ konu. saka
 乙原 (オチバラ 三田市) ochibara ⇐ otsu. bara ⇐ otsu. hara
 馬渡谷町 (モータニチョー 加西市) mootanichoo ⇐ ma. a. ta. choo
 ⇐ ma. wa. tani. choo ⇐ ma. wata. tani. choo ⇐ ma. watashi. tani. choo

子音交替を経て音変化したと思われる地名には、次のような例が挙げられる。

＜子音交替を経た地名＞

例：鳥羽（トリマ 多可町）torima \Leftarrow tori. ϕ a \Leftarrow tor. iha

火打岩（ヒウチワン 篠山市）hiuchiwan \Leftarrow hi. uchi. gwan \Leftarrow hi. uchi. gan

土生（ハブ 南あわじ市）habu \Leftarrow ha. ϕ u \Leftarrow ha. nyu \Leftarrow ha. niu

＊土生 = 土が在るところ

母音融合：隣り合う二母音が一つに融合する現象

例：あたりまえ：atarimae \Rightarrow atarimee

帰る：kaeru \Rightarrow keeru

うまい：umai \Rightarrow umee

熱い：atsui \Rightarrow achii

すごい：sugoi \Rightarrow sugee

母音融合を経て音変化したと思われる地名には次のような例が挙げられる。

＜母音融合を経た地名＞

例：赤穂（アコー 赤穂市）akoo \Leftarrow aka. o \Leftarrow aka. ho

虫生（ムシュー 豊岡市・川西市）mushuu \Leftarrow mushi. u

這田（ホーダ 三木市）hooda \Leftarrow hau. da \Leftarrow hau. ta

食満（ケマ 尼崎市）kema \Leftarrow kee. ma \Leftarrow kui. ma \Leftarrow kui. man

若王寺（ナコージ 尼崎市）nakouji \Leftarrow nyaku. ou. ji ＊若 = ニャク、ニャ（呉音）

青梅²²⁾（オーメ 東京都）oo. me \Leftarrow oo. ume \Leftarrow ao. ume

音位転換：語中で二音の位置が変わる現象

例：あらたし（奈良時代） \Rightarrow あたらし（平安時代以降） cf. 新たに（ara. tani 現代）

山茶花（san. sa. ka \Rightarrow san. za. ka） \Rightarrow sazanka

舌鼓（shita. tsuzumi） \Rightarrow shitadzutsumi

竜胆（ryuu. tan） \Rightarrow ri. tan \Rightarrow rin. taa \Rightarrow rindoo

雰囲気（hun. i. ki） \Rightarrow huinki（間違いやすい語）

＜注：apron \Leftarrow napron（a napron \Rightarrow an apron）＞

22) 東京西部に位置する「青梅」は現在では /oome/ と発音されるため、同じく都内にある「青海」(/aomi/) とよく間違われる。東京臨海新交通臨海線の青海駅に行きたい乗客が JR 青梅駅に行ってしまうという笑えない間違いが後を絶たないという（読売新聞2019年2月19日版）。これは、元々、字面が似ているところに音形までもが似通ってしまったためである。

V. 音変化は何故起こるか？

上で、地名の変化は三種の原理に基づいて起こることを述べた。三種の原理とは、繰り返すと、「経済原理」「必異原理」「明晰化の原理」である。では、これらの原理に基づいて下位規則（「脱落」「音便化」「連濁」「長・短音化」「分節音嵌入」「弱化」など）が地名変化の過程で適用される時、適用の優先順位はあるのだろうか？恐らく、音変化に対して最も強力な力（影響力）を持つのは、「必異原理」であろう。この原理は、音のスムーズな生成と知覚に密接に関わっているからである。つまり、音の生成と知覚に支障を来たような音連続は避けられ、自ずとそのための音変化が起こるという訳である。次いで力を持つ原理は「経済原理」である。人間ができるだけコストパフォーマンスを上げようとするのは、何も言語の使用時にだけ観察されるものではない。とても理に適う自然な原理なのである。最後に、音変化において三番目の引き金となるのは、「明晰化の原理」である。上の二つの原理に基づいて音変化がどんどん進むと、最後には音の知覚と生成に齟齬が生じるまでになる。この時、この行き過ぎた音変化を正すのが「明晰化の原理」である。

このように、上述の三種の原理は地名の変遷に密接に関わり、相反する目的を持つ原理同士が拮抗し合い、時間の経過と共に、地名は徐々に変化していくという訳である。

VI. 最後に

本稿では、難読地名について関西のものを中心に取り上げ、これらがなぜ、そしてどのように難読化したかを類推・考察した。難読地名と言っても、実際に起こった難読化のプロセスは地名に依って異なる。「先斗町」（ポントチョー）や「太秦」（ウズマサ）のような、その地の歴史や伝説を紐解かないと納得に至らない難読地名がある一方で、「神戸」（コーベ）や「赤穂」（アコー）のような、適用された音法則の存在を知れば納得のいく難読地名もあるのである。本研究で扱ったのは、後者である。とはいえ、実は、上述の二種を見極めるのは容易ではない。例えば、東京都港区の「高輪」は「タカナワ」と読むが、これは使われている漢字だけを見ると、「A の B」の型をもつ生産的名詞句「タカノワ」が母音交替を経て（/o/ → /a/）出来たものだとは分析したくなるが、事実はそうではない。「高縄原：タカナワハラ」が原名で²³⁾、後に「ナワ」の漢字表記が「輪」に変わって「原」が脱落したのである。このような理由で、本稿で取り扱った地名は、すでに述べてあるように、伝説的由来のないものに限った。

本研究では、地名に変化を起こす刺激として三種類の原理（経済原理・必異原理・明晰化の原理）を想定し、音変化の過程を推測した。まず、必異原理と経済原理が刺激となり

23) ここでの「縄」は「縄手道」の略で、田の中をまっすぐに走る畦道のことである。昔の軍記物語（『北条記』）の中にその記述があるという。

音変化は進行する。音変化は止まることを知らないので、時間の経過と共に、原形から徐々にかけ離れていくが、音の知覚と生成において支障を来すまでに至ると、今度は明晰化の原理が働いてその時点の音形に修正が加えられる。多くの地名は、このようにして変遷するのである。

参考文献

- 楠原祐介（1981）『古代地名語源辞典』東京堂出版
——（1983）『地名用語語源辞典』東京堂出版
——（1990）『地町村名変遷辞典』東京堂出版
——（1999）『難読・異語地名辞典』東京堂出版
大高博美（2016）二重母音と連母音の違いは何か？—音節構造から比較する英語と日本語の二重母音—
『言語と文化』（関西学院大学紀要）第19号 pp.1-30.
山口恵一郎・楠原祐介（1978）『難読地名辞典』東京堂出版

付録（難読地名の由来についての例）

「太秦」：雄略天皇（418～479）の御世、渡来系の豪族秦氏（秦酒公）が、絹を「うず高く積んだ」ことから、「禹豆満佐＝うずまさ」の号を与えられ、これに「太秦」の漢字表記を当てた。

（京都タウンマップ：<http://www.kyototownmap.com/page/uzumasa.html>）

「先斗町」：先斗町が鴨川に突き出た岬のような場所にあったことから、江戸時代には「先」や「最初」を表す「先斗」に、ポルトガル語が訛った「ポント」の読みをあてていた。1915年に出版された『京都坊目誌』（碓井小三郎著）には、「当初は、東側ばかりに家が建ち、西側にはなかったことから、先斗（さきばか）りという意味で先斗町と呼ばれるようになった」と記載されている。

（金）京都タウンマップ：<http://www.kyototownmap.com/page/ponto.html>）

「膳所」：天智天皇（626～672）が都を大津へ遷したとき、当地を御厨所（厨＝料理をする所）と定めた。それ以前は、琵琶湖岸の田園で「浜田」と呼ばれていたが、以後「陪膳（おももの＝天皇のめしあがりもの）の浜田」となった。それが「膳所」となったのは「陪膳の所」と言う意味から。ブリタニカ国際大百科事典

「放出」：放出の地名由来には2説あり。一つの説は、古代の大阪は内陸部が湖となっていて、この付近で湖水が旧淀川への放出口となっていたことから、水の「はなちてん」がなまって「はなちで」（放手）を経て「はなてん」になった。もう一つの説は、三種の神器の一つ草薙の剣を、剣が安置されていた熱田神宮から盗み出して逃げようとした新羅の僧（道行）の乗った船が難破してこの地に漂着し、神の怒りを恐れて剣を放ったという伝説に由来する。

<http://suumo.jp/journal/2012/07/28/25537/>

「吹田」：1150年頃、すでに「吹田庄」の記録あり。地名の由来では三説がある。

1. 「水田庄」とも書かれたことがあり、ここから発祥した。
2. 元々は「フケタ（深田）」で、「フケタ（吹田）」となり、これが「スイタ」と呼ばれるようになった。
3. 「スギタ（次田）」と書かれていたものが「スイタ（吹田）」と書かれるようになり、後に音変化した。

『地名由来辞典』<http://chimei-allguide.com/>

「枚方」：地名由来は以下の3説

1. 「比羅婆駄」説：日本書記中の継体天皇（450?～531）24年10月の条にある「比羅婆駄」より
2. 「平潟」説：河内湖にそそいでいたため、あちこちに潟が入り組んでいたため
3. 「白肩」説：神武天皇（紀元前711～785）の東征で近畿への上陸地点が白肩之津であった。尚、「枚」は訓で「ヒラ」とも読まれる（例：一枚 = hitohira）参考：朝来市「枚田 = hirata」

枚方市 HP <https://www.city.hirakata.osaka.jp/0000006914.html>

「交野」：「かたの」の地名は、この地を肩野物部氏（3世紀末?）が開拓し永く支配したので「カタノ」と呼ばれるようになった。その後、平安時代に歌を詠む人達の発想で、「人が行き交う野」という意味で、「交野」という字が使われる様になった。潟野からきたという説もあり。

交野市 HP <https://www.city.katano.osaka.jp/docs/2014022600023/>

「間人」：聖徳太子の生母・間人（はしうど）皇后が蘇我氏と物部氏との争乱を避けて丹後の地に身を寄せ、のちに当地を去るに当たって自らの名をこの地に贈ったものの、住民は「はしうど」と呼び捨てにすることを畏れおおく思い、皇后が退座（たいざ）したことに因み間人を「たいざ」と読み替えた。京丹後市 HP <http://www.kyotango.gr.jp/rekisi/7princess/%E9%96%93%E4%BA%BA%E7%9A%87%E5%90%8E/>

「売布」：下照姫神（シタテルヒメ）は当地の里人が飢えと寒さで困窮しているのを愁い、稲を植え麻を紡ぎ布を織ることを教え、その後豊かになった里人が下照姫神を祀ったという伝承が残る。米種（まいたね）か売布谷（めふたに）が「売布」に転訛した。（売 = メ：呉音）

宝塚市 HP <https://blogs.yahoo.co.jp/dekunobou36/42861069.html>

「老波」：「老」を老人からのイメージで「シワ」（皺）と読ませているのだろうと容易に察しがつく。但馬風土記では「志波奈美」と表記されている。

Why are many area names difficult to read in Japan?

— An investigation of the sound changes applied in them —

Hiromi OTAKA

Abstract

It is a well-known fact that in Japan not a few area names written in Chinese characters are hard to read. This is because the Chinese characters used for them as in 先斗町 (/pontochoo/: a district in Kyoto city) have deviated a great deal from the original standardized way of reading. This type of area names varies in terms of the process of sound changes they underwent in the past. The obfuscation in sound changes of some area names was likely caused by something historical or legend, while that of others were by the application of regular phonological rules such as *elision*, *intrusion*, *sequential voicing* based on the three universal linguistic principles, i.e. Principle of Economy (PE) , Obligatory Contour Principle (OCP) and Principle of Clarification. The type of area names being dealt with in the present paper is the latter one.

Area names are likely to change as time passes by in response to the requests from OCP and PE. However, another one called the Principle of Clarification tries to keep them from changing too far so that they can maintain intelligibility for reading. The role of this principle is not only to stop the excess of sound changes, but also to redress them in the name of clarification. This is how area names constantly change with time.